FEATURE STORY

環境教育がビジネスを動かす

ホンダの「ガキ大将の森　30泊31日キャンプ」で。毎日、108段の階段を上って水くみや皿洗いに行く

「環境教育」をCSR活動の一環として手掛ける企業が増えている。ISO26000の中でESD（持続可能な開発のための教育）が重要事項として盛り込まれたほか、6月には「環境教育等促進法」が改正され、地域や企業の枠組みを超えて取り組むことが求められるようになった。だが、環境教育をどのような形で進めていくかは、まだ日本企業の間で共通の認識がないのが実情だ。環境教育を通じて、企業や地域は何を目指せば良いのか。

副編集長＝吉田広子、編集委員＝奥田みのり、関口威人、フィンランド＝靴家さちこ、ニュージーランド＝クローディアー真理、イタリア＝粉川妙、中国＝斎藤淳子、デンマーク＝ニールセン北村朋子

ホンダ、里山に学ぶ組織論

火をおこさなければ食事なし、海岸まで約60キロメートルの道のりを歩く、ナイフを使って魚をさばく――。緑豊かな里山のなかで自分の力で生きて行く力を身に付ける「ガキ大将の森　30泊31日キャンプ」が今夏開催された。

今年は小学4年生から中学2年生の男女20人が参加。もちろん保護者は同行しない。開催地は、栃木県茂木町の自然体験施設「ハローウッズ」だ。

ハローウッズは、本田技研工業が山間部を切り開いてつくったサーキット場「ツインリンクもてぎ」敷地内にある森を、「里山」として保存しようと2000年にオープンした。ここがホンダにとって、環境教育や自然体験を実践する最前線の現場だ。

キャンプを訪問したホンダの伊東孝伸社長は「循環しながら成長していく里山には、どうすれば人が伸びる組織をつくれるか、ヒントがある」と話す。

「子どもの元気はサステナブルな社会につながる」とホンダの伊東孝紳社長

ハローウッズのテーマは「森の元気と子どもの元気」。「森の元気」といっても「森を守ること」ではなく、「森に手を加える」ことだ。里山では、地面に光が届くように、木の上を掃除したり、切ったりする。下の支えがなければ、上の葉の先端部分も雨風に耐えられない。

伊東社長は「地面から木がすくすくのびるように、光を入れ、風通しの良い循環型の組織を目指したい。会社の繁栄とはまさに里山だ」と、組織論を披露した。

なぜ環境教育が必要なのか

そもそも「環境教育」とは何か。企業はなぜCSRとして取り組む必要があるのだろうか。

山梨県清里高原で子どもや法人向けに自然体験プログラムを提供するキープ協会の環境教育事業部シニアアドバイザー川嶋直さんはこう話す。

「環境教育は、単に環境問題を理解するためだけの教育ではない。環境教育の本質は、答えの出ない問題にどう向き合うのか、どんな暮らしをするのか、どんなエネルギーを選択するのか、自分で考える力を養うことにある」

企業がCSR活動を実践する上で、社員も、地域の子どもたちも、そして自然やその構成物も重要なステークホルダーである。こうしたステークホルダーと対話を重ね、持続可能な社会に向けての共通の価値観を醸成することが環境教育の最大の目的だ。

国連は、2005年から2014年までを「持続可能な開発のための教育の10年」と定めた。持続可能な発展のための教育（ESD）では、環境を含め、開発や平和など幅広い分野を対象にしている。

2010年11月に発行されたISO26000でも、ESDの重要性が盛り込まれた。さらに、今年6月に開催された国連持続可能な開発会議（リオ＋20）では、成果文書で2014年以降もESDを推進していくことで合意した。2014年には、ESDに関する世界会議が名古屋市と岡山市で開催される。

ESDは「持続可能な社会の担い手づくり」を目的にしているが、その過程は企業の協力なしにはありえない。

立教大学ESD研究所の阿部治所長は、「自然が健全でなければ社会も経済も成り立たない。そうであれば、企業は社会責任として環境教育に取り組まなければならない」と語る。

阿部所長は、「企業がCSRの一環としてESDに取り組めば、リスクをチャンスに変えることすら可能だ」と指摘する。環境、平和や人権など、企業を取り巻く社会課題の解決を通じて、新しい事業展開

「三現主義」で子どもたちを動かす ホンダの30泊31日キャンプ

ホンダの「ガキ大将の森　30泊31日キャンプ」をプロデュースするのは、北海道の「然別湖（しかりべつこ）ネイチャーセンター」で代表を務め、氷上アイスバーや氷上露天風呂を造ってきた崎野隆一郎さん（55）だ。

背が高く、日に焼けた肌に白い口ひげが印象的な崎野さんは、子どもたちからは「りゅうさん」と呼ばれ、慕われている。子どもたちに、印象を聞くと「おっかない」と口をそろえる。

崎野さんが徹底しているのは「三現主義」。「現場」「現物」「現実」を何よりも大切にしている。

「生きていく上では『想像力』と『創造力』が大切。『先回り教育』に慣れ親しんだ子どもたちが、自分の無力さに向き合い、助け合いながらいかにして自分たちで生きていくか。そうした力を養うことがキャンプの醍醐味」と話す。

7月27日、30泊31日の長いキャンプが始まった。最初に教えるのは、火のおこし方、そしてナイフとロープの使い方。6日目には、1泊2日のソロサバイバルキャンプに入る。一人ひとりビニールシートとロープでテントを作り、支給された15本のマッチと集めた枝葉で火の用意をする。

崎野さんは、「個人の生きる力を磨かせたい。その手始めが、枝葉の採集、火おこし、ナイフを使っての料理」と語る。

キャンプ後半、ベースキャンプから離れて、2泊3日の「みんなでサバイバルキャンプ」が行われる。子どもたちは、3チームに分かれ、キリモミ式で火をおこす。火をおこせなければ、チームは全員食事抜きだ。今年は、レッドサンダーチームが2日間、火をおこせなかった。

家族やスタッフの助けもなく、ご飯も食べられない。涙もかれ、「やるしかない」と決めた瞬間に火が点く。レッドサンダーチームも3日目にして、ようやく食事をすることができた。子どもたちは、ごはんの美味しさをかみ締める。

レッドサンダーチームの班長だった小学6年生の夏目広輝くんは「時間を守り、言ったことに責任を持って、自分のことは自分でしていきたい。火おこしを学んで生きていく力が身に付いた。これからは、一つひとつの意味を考えながら生きていきたい」と最終日に作文を書いた。

崎野さんは、「キャンプが終わると子どもたちはすぐに元に戻ってしまう。でも、この1カ月間の体験は、体にしみこんでいる。いつか独り立ちをするようになったとき、人生の挫折を味わったとき、自信を持って生きてほしい」と思いを語った。

飯ごうでご飯を炊き、迎えに来た家族に、自分たちでさばいたアジのフライとカレーをふるまった